【総 説】

がんの補完代替医療
Complementary and
Alternative Medicine in
Cancer Treatment

兵 頭 一之介
Ichinosuke HYODO

国立病院四国がんセンター

【要 旨】

世界的なインターネットの普及や予防医学、自己健康管理への関心、患者の治療選択における自己決定意識の高まりなどから、近年、補完代替医療（CAM; Complementary and Alternative Medicine）の利用者が急速に増加している。わが国のがん患者において CAM のうち最も利用頻度の高いものは健康食品で、情報もこれに偏っているが、臨床試験で有効性を確認されたものはほとんどない。先進諸国では西洋医学的手法に則った CAM の有効性を検証するための臨床試験を遂行しようとする機運が広がっている。米国補完代替医療センターでは、現在、多くの臨床試験が行なわれており、我が国でも厚生労働省がん研究助成金によるがんの CAM に関する研究班が設けられ、金沢大学医学部に我が国初のがん CAM の専門講座が開設され、この分野の本格的な研究がスタートしている。

【キーワード】

補完医療、代替医療、がん治療、臨床試験

1. はじめに

この総説を書き始めるにあたって著者の立場を明らかにしておきたい。著者は補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine: CAM）として用いられる療法の専門家でも施術者でもなく、しばしばこれら療法を利用する患者の主治医として西洋医学の治療に当たっているものである。転移を生じているような進行した段階の患者の化学療法（抗がん剤治療）に従事している腫瘍内科医である。ここではエビデンスに基づくインフォームドコンセントを行ったうえで患者の自己選択権を尊重し、可能な限り科学的な治療を提供し客観的な評価を行うよう努めている。インフォームドコンセントの過程では標準的な治療法から始まり代替治療として有用性のエビデンスが劣るものをも紹介している。この代替治療の中には有効性が標準治療に劣るものも含まれているが、いまだ標準治療との優劣が明らかにされていない新規の有望な治療法も含まれている。しかし、代替治療といえども現在の科学的評価法によって有効性と安全性が一定の基準で実証されているものしか提示すべきでないことはもちろんである。このように近代西洋医学における代替治療とは標準治療の代わりに提供することができるだけの科学的検証を受けた治療法を指している。一方、CAM とは西洋医学的手法によって有効性や安全性が確認されていない医療と考えられている。代替という用語が同一であるため混乱や誤解を生じやすく、違和感をぬぐえないが、世界的にも名称については同様の状況にある。いずれにしろ CAM は西洋医学的手法によって評価されていない医学ということになるが、それでは西洋医学的手法とは何か？それは臨床試験である。臨床試験の倫理的規範はヘルシンキ宣言に求められ、科学的検証法は近年 ICH-GCP（International Conference on Harmonization—Good Clinical Practice）へと結実している。つまり CAM においては臨床試験がほとんど行われていないということである。CAM には古くからの経験に基づく療法があったり、自然界の生物を用いたりするものが多く、臨床試験には馴染まないとする意見も多い。確かに瞑想や民族哲学的な療法などに関しては臨床試験で評価することは困難を伴うが、医学的に臨床試験でしか評価しようのないサプリメントなども存在している。著者は CAM に対して否定的な立場を取るものではなく、臨床試験を通じて CAM の有用性を客観的に明らかにすべきであるとの立場を取るものである。この総説ではがんに関連した

CAM について記載することにする。

CAM は近年急速に利用者が増加している。これには世界的なインターネットの普及や予防医学、自己健康管理への関心の高まりなどが理由と考えられる。近年、我が国のインフォームドコンセントの形式は医師依存型—主導型から情報公開—患者自主選択・自立型の形態へと大きく変化し、患者の治療選択の意識が大きくなっている。そのひとつに CAM があるが、中にはこれが主体の医療に置き換わり問題となる例も知られている。このような背景から西洋医学的手法に則った有効性を検証するための臨床試験を遂行しようとする機運が先進諸国に広がっている。米国国立補完代替医療センター（NCCAM: National Center for Complementary and Alternative Medicine）では現在 17 のがんに関連した CAM の臨床試験が行なわれている¹⁾。我が国でも 2001 年度から日本内科学会認定専門医部会で健康食品に関するデータベースの作成が開始され、厚生労働省がん研究助成金によるがんの代替療法に関する研究班が設けられ、2002 年には金沢大学医学部に我が国初の CAM の専門講座が開設され、この分野の本格的な研究がスタートしている。

2. CAM の定義

大学医学部で教育されている現代西洋医学以外の医療とされているが、近年、CAM の授業を取り入れる大学も増えてきている。西洋医学は現代の主流の医学であり mainstream medicine とも呼ばれている。この西洋医学を通常医学（conventional medicine）として代替医療を非通

常医学（unconventional medicine）と呼称したり、漢方、鍼、灸を中心とした東洋医学や世界中の伝統的、民族的な医療を伝統医学（traditional medicine）、その他に主流の医学の変わりになる医学あるいはこれにとって代わる医学として代替医学（alternative medicine）、あるいは補うものとして補完医学（complementary medicine）とも呼ばれる。日本補完代替医療学会では「現代西洋医学領域において、科学的未検証および臨床未応用の医学・医療体系の総称」としている。近年、多額の研究費をつぎ込み精力的に CAM 研究を推し進めている米国では補完代替医療（CAM: complementary and alternative medicine）と呼んでいる。米国国立補完代替医療センター（NCCAM: National Center for Complementary and Alternative Medicine）では「通常の医療に加えて、あるいは代えて（替えて）使用される治療への思考体系、方法、治療（Healing philosophies, approaches, and therapies used in addition to, or instead of conventional treatment）」と定義されていたが²⁾、最近、日本補完代替医療学会の CAM の定義と類似した内容に変更されている。そして CAM と考えられている分野は表 1 のように分類されている。

このように CAM の範疇と考えられる医学体系は多数存在し、哲学的医学体系を構成するものからサメの軟骨やメガビタミンなどの内服治療薬あるいは健康食品まで様々である。この中には漢方薬の一部、鍼、整体、認知行動療法、患者教育など世界中の多くの国々で主流医学に組み込まれているものも多い。また現在西洋医学で使われる治療薬には民間療法として使用されてきた植物などから抽出、製造されたものも多数存在する。従って、CAM を論ずるときには、その何を具体的に問題にしているのかを明確にする必要がある。

表 1 CAM の種類

分類と名称	内 容
代替医学系 Alternative medical systems	伝統医学系統、民族療法（東洋伝統医学、アーユルベータ、ユナニ、シャーマニズム等）
精神・身体交流 Mind-body interventions	瞑想、催眠、舞踏、音楽、芸術療法、祈り等
生物学に基づく療法 （代替バイオ療法） Biologically based therapies	ハーブ、特殊食品、生理活性分子（マグネシウム、メラトニン、ビタミン等）、サメ軟骨等を利用した治療
指圧など外部からの力で治療する方法 Manipulative and body-based methods	マッサージ、整体、整骨療法等
エネルギー療法 Energy therapies	気功、霊気、タッチング療法、電磁療法

3. CAM の現状

3.1 世界の状況³⁾

CAM は多くの発展途上国においては高い利用頻度を示し、主流医学としての位置を占めている。西欧の先進国においても CAM の利用頻度は近年急速に増加傾向にある。これまでに報告されている各国の CAM の利用頻度を図 1 に示した。エチオピアからウガンダまでは、初期の医療として CAM が利用される頻度を示し、カナダからベルギーまでは利用経験者の比率を示している。つまり、前者は通常医療として、後者は主に補完医療として CAM が使用される頻度である。

このように先進国においても国民の 3 分の 1~2 の人々が CAM を利用したことがあると報告されている³⁾。米国での一般家庭を対象とした CAM 調査では、1990 年 34

図1 世界の代替医療の利用状況
WHO Policy Perspectives on Medicines. Traditional Medicine 2002

%, 1997 年 42%の利用率で, 診療所に受診する回数よりも CAM 提供者のところを訪れる回数のほうが多くなっていると報告されている⁴⁾. がん患者における CAM 利用率は 26 の論文において 7%から 64%と大きな違いがあるが, これは各論文間の調査方法, 調査対象, CAM の定義などの違いに起因していると考えられる⁵⁾. 利用頻度ではハーブ, 健康食品などが上位を占めている.

CAM の費用に関する統計資料は世界的にも少ない. マレーシアでは年間 5 億ドルが代替療法に費やされ, 通常医療は 3 億ドル. 米国では 1997 年の代替医療への国民支出は 277-344 億ドル (約 3 兆~4 兆円) であり, 同年の通常医療費の総自己負担費に相当すると見積もられている. 英国では 23 億ドル, カナダでは 24 億ドルと推定されている. 世界中の CAM で使用されるハーブ療法の支出は 600 億ドルと推定され, 米国では 1996 年から 1998 年の 2 年間でハーブの売上は倍増している.

3.2 日本の現状

我が国では医療者のがんの CAM に対する認識は希薄で, これまでに系統だった研究はほとんどなされてこなかった. しかも, インターネットやその他のメディアを通して, 健康食品あるいは民間療法に関する情報は大量に流布しているが, 医学的, 科学的見地からして信頼性の置ける正確で有用な情報は決して多くない. このような現状の中で多くのがん患者が医学的根拠に乏しい CAM を利用し, 医療従事者は参照すべき情報不足から, この問題に対処せず, 医療現場では患者と家族は氾濫する情報に振り回されるという好ましくない状況を招いている⁶⁾. これまで日本においては CAM の実態は不明であった. そこで著者らは厚生労働省がん研究助成金による援助を受け, 「我が国におけるがんの代替療法に関する

研究」班を組織し, 2001 年から 2002 年にかけて全国 56 施設の協力を得て大規模患者アンケート調査を実施した. 3099 人のがん患者から有効回答が得られ, CAM 利用率は 44.6%であった. CAM の内訳は健康食品 89.1%, 漢方 7.1%, 気功 3.8%, 灸 3.7%, 鍼 3.6%であった. CAM を利用する理由としては進行抑制・改善を期待 67.1%, 治癒を期待 44.5%, 症状軽減を期待 27.1%. がん患者一人当たりの CAM に要する費用は月平均 5.7 万円であった. CAM のほとんどは健康食品であることが明らかとなったが, 使用されている健康食品はアガリクス, プロポリス, AHCC などである. これら健康食品のがんに対する効果を検証するための臨床試験は未だ十分とはいえない. しかし現実には動物を用いた基礎的研究や体験本を通してがんに対する効果が強調され多くのがん患者で使用されている. この研究班では本アンケート調査の他, がんに対する健康食品のデータベースの作成, がんの代替療法の評価と臨床試験の可能性などについて研究を行っている.

4. CAM 研究

米国では 1992 年国立衛生研究所 (NIH: National Institute of Health) 内に代替医療事務局 (Office of Alternative Medicine) が創設され本格的な CAM 研究が開始された. その目標は 1) 代替薬物治療評価を進める, 2) CAM の効果の調査と評価, 3) 市民との情報を交換するための情報収集センターの設置, 4) CAM の研究支援などであった. この研究施設は 1998 年に NCCAM に昇格され 2003 年には, 11,400 万ドル (約 135 億円) の年間予算が計上され, 臨床試験を含めた多くの研究活動を行なっている. 米国国立がん研究所 (NCI) 内にはがん領域における CAM 研究を目的とするがんの CAM に関する事務局 (OCCAM: Office for Cancer CAM) が設けられ NCCAM と連携しながら研究を進めている.

ここで少し米国における CAM の評価方法を紹介する. これは NCI のホームページの Cancer Fact: Complementary and alternative medicine in cancer treatment: Questions and Answers に掲載されているもので基本的には次の 3 項目からなっている. 1) 通常医療で用いられる評価法を CAM にも当てはめて評価する. つまり臨床試験を行なって客観的な評価を行なう. 2) CAM に特徴的な評価過程として 1991 年から代替医療の早期データの評価法 Best Case Series (BCS) Program を開始している. 3) NCI が資金提供して臨床試験を行なう. 表 2 に現在 NCI が行なっている CAM を用いたがん治療の臨床試験の一部をまとめた. その中には鍼治療やマッサージ

表2 NCIが行なっているCAMのがん臨床試験（一部のまとめ）

試験治療（CAM 治療）	対象がん種	試験の相	症例数	評価項目	対照（標準）治療
標準治療＋サメ軟骨（Benefin）	進行乳癌，進行大腸癌	III	600	生存期間，安全性，QOL	標準治療
白金抗がん剤＋放射線サメ軟骨抽出物（Neovastat）	非小細胞肺癌（IIIA/IIIB 期）	III 二重盲検	756	生存期間，無増悪生存期間奏効率，安全性	白金抗がん剤＋放射線＋プラセボ
強化腫瘍分解酵素療法（Kelley/Gonzalez regimen）	切除不能肺癌 Stage II, III, IV	III 患者選択	72-90	生存期間，QOL	ゲムシタビン
セレンウム＋プラセボ ビタミン E＋プラセボ セレンウム＋ビタミン E	前立腺癌予防	III 二重盲検	32,400	前立腺がん発癌率，その他のがんの発癌率など	プラセボ
ヤドリギレクチン（Mistletoe lectin, Recombinant viscum）皮下注射＋ゲムシタビン	肺癌，大腸癌，非小細胞肺癌，乳癌	I	40-50	至適投与量の決定，毒性評価，薬物動態検討，免疫パラメーターの検討	なし
朝鮮人参 イチョウ 朝鮮人参＋イチョウ	健常者（がん予防）	II 無作為化 二重盲検	60	薬物／ハーブ相互作用の検討 4つの薬物を使用した代謝能の測定も含まれる	プラセボ
本当の鍼治療 見せかけの鍼治療	2種類の化学療法に抵抗性を示した進行大腸癌	I 無作為化 単一施設	170	終末期の苦痛改善	通常の緩和ケア
カルニチン（L-carnitine）	末期がん	II 無作為化 二重盲検	130	終末期の疲労の改善 カルニチン欠乏を対象	プラセボ
とりなしの祈り（Distant healing; DH）	脳腫瘍（グリオブラストーマ）	II 無作為化	150	生存期間，機能改善	DH なし
マッサージ（REST: reducing end-of life symptoms with touch）	末期がん患者	II	440	疼痛緩和，QOL 改善	－
マッサージ	乳癌治療に伴う上肢のリンパ浮腫	－ 無作為化	88	リンパ浮腫改善	マッサージ＋圧迫包帯
スウェーデン・マッサージ	乳癌，卵巣癌，前立腺癌，大腸癌	II 無作為化	60	疲労改善	通常ケア

や写真を用いた遠隔地からの“とりなしの祈り”（他人のために祈るあるいは治癒を願う）など，臨床試験が困難に思える治療法も含まれている．そのような治療法をも現代医学の検証法に当てはめて科学的に解明しようとする姿勢には驚かされる．しかし，NCI がスポンサーとなって臨床試験を開始するには，ある程度のエビデンスが必要とされており，その最初の段階が BCS Program である．

新たな CAM は多くの場合，既に実践されはじめてから，つまり市井に出回ってから初めて医療者や患者に知られるところとなる．したがって NCI の OCCAM の BCS 担当者（薬剤開発の知識を有する医師や看護婦）は CAM 実践者から 5～10 例の有効例を報告させ，内容の批判的な吟味が行なわれる．この報告には，あらかじめ記載さ

れるべき内容が規定された症例報告書（case report form）が必要とされているが，提出された報告書には次のような様々な問題点が指摘されている．

1. 診断が正確に為されていない，あるいは記載されていない
2. アジュバント設定でありながら病巣が残存しているか否か，明らかにされていない
3. 主観的な評価項目（気分が良くなった，元気を取り戻したなど）を使用している
4. 例外的な長期生存を取り上げている
5. 直前あるいは同時期に通常医療が施行されている
6. 製品の製造過程や成分の均質性などが不明確
7. 後ろ向きの報告のため必要とされるデータが欠損している

8. 患者は死にそうなのにひとつの腫瘍塊が縮小したと報告

このような内容は体験本でしばしば経験するところである。いずれにしろこのような検討を行なった後、がんに対する効果が示唆される CAM については Cancer Advisory Panel for CAM (CAPCAM) に上げられ、さらに詳細な検討が行われる。この CAPCAM は 1999 年に NCI と NIH の NCCAM とが協力して結成されたもので、腫瘍医、腫瘍専門看護師、代替医療専門家、FDA の統計家、疫学専門研究者、患者代表などの計 15 名のメンバーで構成されている。ここでの検討において BCS process の次のステップが以下のいずれかに決定される。1) 小規模の前向き試験（数十例の prospective trial あるいは 100 例以下の無作為化比較試験）、2) NCI から CAM 実践者への実地調査、3) 作用機序などの基礎的研究。これらを行なった後、有望なものに関しては NCI 主導の大規模第Ⅲ相試験が行なわれる。以上の試験結果も含め、これまでに発表された論文は CAM 専用のエビデンス評価基準で評価される。4 段階の試験デザイン（無作為化比較試験～有効症例報告）による証拠の強さ（Strength of study design）と同じく 4 段階の評価項目（全生存率～奏効率）による証拠の強さ（Strength of endpoints measured）の両者を組み合わせて判定する方法である。しかし、これは専門的な医療関係者でもわかり難い複雑な評価方法であり、もっと簡便な方法を考案する必要があると思われる。

グローバルなレベルでは世界保健機構（WHO: World Health Organization）が 1970 年代から CAM に関する取り組みを開始し、1990 年代以降ガイドラインやレビューを相次いで公表している。Guideline for the assessment of herbal medicine (1991)⁷⁾、Research guideline for evaluating the safety and efficacy of herbal medicines (1993)⁸⁾、Guidelines for clinical research on acupuncture (1995)⁹⁾、Regulatory situation of herbal medicine: a worldwide review (1998)¹⁰⁾、Guideline on basic training and safety in acupuncture (1999)¹⁰⁾、WHO traditional medicine strategy 2002–2005³⁾ これらの解説は省略するが CAM に関する世界的関心は急速に増し、その科学的評価や正確な情報を求める機運は高まっている。

我が国では 1998 年に日本で初めて CAM に関する学術会議が開催され、日本補完代替医療学会として現代西洋医学の立場から CAM の科学的な検証を事業の主たる目的として活動がスタートしている。また 2002 年 3 月に日本で初めて金沢大学医学部に CAM 研究を専門とする補完代替医学講座が開設された。この分野における我が国の取り組みは端緒についたばかりといわざるを得ない。ここまでのまとめとして CAM に関する日米比較を

表 3 CAM の日米比較

	米 国	日 本
利用頻度	42%	66–76% ^{12,13)} 、(がん患者で 45%)
費用（年間）	270 億ドル（約 3 兆円）以上	通常医療の自己負担費の 50% ¹³⁾ 、(がん患者で約 530 億円以上)
医学教育	75/117 大学	16/80 大学 ¹⁴⁾ *
推進者	60% は医師	不祥（がん領域では企業が主体）
研究機関	NCCAM (NIH)	金沢大学医学部に専門講座（基礎・臨床系）
	OCCAM (NCI)	山梨大学医学部に専門講座（基礎系）
研究予算	1993 年 200 万ドル**	2003 年、文部科学省科学研究費の細目として「代替医療」が初登場
	2003 年 11400 万ドル** (約 135 億円)	

*東洋医学の講義・講座が主体、**NCCAM の年間予算

表 3 に示した。

5. 臨床医の CAM に対する認識

CAM に関するさまざまな疑問を持ち、それを利用する患者にどのように対処すべきか悩んでいる臨床医は多い。あるいは有効性の科学的証明に乏しいことから CAM を無視し関心を示さず放置していることも多い。確かに遺伝子研究は飛躍的に進み、がんの生物学的特性が明らかにされ、分子標的薬も次々に臨床に登場している現代、ますます医学は専門化、分業化し複雑さを増している。このような中で CAM に対して科学的評価を行なうだけの価値は無く、人的、経済的医療資源と時間は有効に使われなければならないとする意見には説得力がある。このような実態は多くの西欧医学を主流医学としている国々の共通の問題となっている^{15,16)}。しかし米国の腫瘍関連学会でも、近年、様々なジョイントシンポジウムが催され、臨床腫瘍医の CAM に対する関心も少しずつ広がりを見せ始めている^{16–18)}。その理由としては、CAM 提供者によるインターネット、新聞広告、体験本などを利用した巧みな宣伝とインターネット販売をはじめとする通販機構の進歩により CAM 利用者が増加していること、それに伴い患者や家族から CAM の有効性や有害事

象についての質問が多くなったこと、利用者が増すにつれ有害反応に対する危惧が増していること、同時に患者からの有効性検証の要望が増していることなどが考えられる。次第に我が国でも臨床腫瘍医にとって避けて通れない問題となりつつある。最近、日本の医師の CAM に対する認識を調査した論文が、いくつかの英文誌に掲載されている^{19,20)}。全国 751 名の臨床腫瘍医のアンケート調査結果では、腫瘍医の 82% は CAM で使用される健康食品類にはがんに対する有効性は無いと考え、その理由として信頼できるエビデンスが無いことをあげている。また 84% の腫瘍医が抗がん剤との相互作用を危惧していると答えている。

6. 健康食品の問題

がんで使用される CAM のうち健康食品の利用は最も多い。しかし、これまでに健康食品ががん患者に対していかなる効果であれ、明らかな効果をもたらしたという明快な科学的証拠はほとんど無い。現在、健康食品を定義する法律はなく、一般的に健康維持の目的で用いられ、通常の食品とは異なる形態の粒状、カプセル状などの食品と考えられている。薬理的作用により疾病の予防や改善が期待される食品（高血圧や糖尿病などに良いとされるものなど）で、法的に規定されているものには特定保健用食品がある。平成 15 年 10 月 7 日現在、396 品目が厚生労働省より認可されている。これはあくまで通常の食品のかたちをしたもので、錠剤やカプセル状の形態をしていないものとされている。健康食品と呼ばれるものの中には錠剤、カプセル、粉末状のものを業者が健康食品と勝手に名づけて市販しているものが多い。現在、このような健康食品に対しては財団法人日本健康・栄養食品協会が含有成分などの製品規格、製造と加工の基準、適切な表示と広告（食品衛生法、薬事法、栄養改善法などに適合しているか）などを審査し JHFA マークを付与している。しかし、実際にはこのマークの無い健康食品が非常に多く存在している。

サメ軟骨の抗腫瘍効果、血管新生抑制効果が報告され²¹⁾、現在、米国では NCI をスポンサーとして NCCTG (North Central Cancer Treatment Group) を中心に、切除不能乳がん和大腸がん患者を対象としたプラセボを使用した二重盲検無作為化比較第 III 相試験が行なわれている（表 2）。エンドポイントは生存、毒性、QOL である。国の医療事情や研究体制の違いもあるが、我が国においてもがん患者に使用される頻度の高い健康食品については、きちんとした臨床試験を行う必要がある。そのステップとして健康食品は既に世間に広く使用されているもの

であるから、まず確実な有効例 (Best case series) の収集、次に小規模な比較試験、そして最終的には十分な検出力を有する大規模比較試験が行なわれなければならない。これと同時に副作用症例の積極的な報告が為される必要がある。

健康食品の一部には健康被害を生じているものも報告されているが^{22,23)}、多くのものでは健康に害を及ぼすことは無いあるいはまれとされている。しかし、薬物と併用される場合には相互作用の可能性もあり注意しておく必要がある。グレープフルーツの成分が CYP 3A3/4 を抑制し、スタチン系の薬剤や抗ヒスタミン剤内服患者に筋肉痛や不整脈を生じることは良く知られている。現在までに抗がん剤との明らかな相互作用を有する健康食品は報告されていないが、サリチル化ハーブ類などでは理論的にはメソトレキセートや類似薬の尿への排泄を阻害する可能性がある。また前立腺がんの効果があるとされるハーブの合剤にエストロゲン作用を有する成分が含まれていたという報告もある²⁴⁾。

わが国の CAM に関する情報は、健康食品に関するものに偏っており、その圧倒的多数が「驚異の治癒力」とか「末期がんからの生還」、「〇〇学会で絶賛」「フェーズ III で実証」といった文言をちりばめた単行本やインターネット上のホームページによる。しかし、このようなあたかも多くの医師が認めているかのような語調の見出しでも、当該学会の実際の学会抄録には発表された形跡がなかったり、臨床試験に関する専門用語を使っただけで実体のないものが多い。かろうじて論文の体裁をとっているものでも、その多くが試験管レベルの基礎研究が一例報告であり、その効果を検証するための前向きな臨床試験あるいはメタアナリシスの結果は皆無に近いのが現状である。医薬品にしか許可されていない効能の表示は違法であり薬事法、食品衛生法、景品表示法、栄養改善法などにより規制されている。しかし、がんの予防や治療に有効性を謳う健康食品は多数存在している。医療者にとってハーブ（薬草・生薬）やキノコ類、その他の自然界の生物から得られる成分を含む健康食品に関する適切な情報の提供は緊急の課題である。最近、Memorial Sloan-Kettering Cancer Center (NY) 内に設置されている Integrative Medicine Service が作成・運営しているウェブサイト (<http://www.mskcc.org/mskcc/html/11570.cfm>) に 135 種類のハーブや植物性薬品について、治療に用いる際の条件や有害作用、薬物相互作用などの情報を掲載している。このサイトではサプリメントに関して文献に基づき科学的検証を行った上で、その臨床の効果について客観的に記載した情報を発信している。厚生労働省の研究班においても医学的、客観的な立場から、現在我が国

健康食品〇〇〇〇
臨床的まとめ 「〇〇〇茸」は、学名を「××××」、和名を「△△△△」という担子菌類△△△科の食用きのこで、原産地は△△△△地方。疲労回復、健康増進、抗がん作用、免疫促進効果を期待して使用される。ヒトにおける免疫活性を賦活しがん治療や成人病の予防に対する有効性を示唆する報告はあるが、実際に特定の疾病における有用性を実証した臨床試験は無い。これまでにこのもの自体による副作用は報告されていない。
商品名 〇〇〇茸、他、多数。
宣伝されている用途 (本HP作成者の評価や意見ではなく、また推奨するものでもない) <ul style="list-style-type: none"> ● がんの治療 ● がんの予防効果 ● 糖尿病 ● 高血圧 ● 動脈硬化 ● 慢性胃腸疾患 ● 肝障害 ● アレルギー疾患
成分 <ul style="list-style-type: none"> ● 高分子多糖体ベータ-D-グルカン ● 〇〇〇〇〇〇 ● その他、蛋白、アミノ酸、ビタミン、ミネラル、酵素類
作用機序 [文献番号1~14] 動物やヒトの血液細胞を用いた基礎的研究がほとんど。直接の抗がん作用は無いとされている。基礎的研究からはNK細胞活性の増強、樹状細胞の成熟化、マクロファージ数の増加とTNF- α の誘導、腫瘍血管新生の抑制などの作用が報告されている。 臨床試験は無い。
体内薬物動態 有効成分が確定しておらず、体内動態の検討は行われていない。一般に既述の作用を示すとされている高分子多糖体(β-D-グルカン、ヘテログルカン、糖蛋白)は経口摂取で体内にその

図2 がん患者に利用されている健康食品のまとめの一例

でがん患者に利用されている健康食品に関するサマリーを作成し、公表する予定である。その一例を図2に示した。

7. 今後の課題

世界規模で西洋医学的手法を用いたCAMに対する研究が進められている。我が国では早急にevidenceに基づくCAMのデータベースの作成、学会や公的機関による臨床試験体制の確立が望まれる。その他、CAM奏効例の収集、検証システムの開発、副作用例の集積と使用者や医療機関への周知方法、健康食品の利用方法や安全性に関するガイドラインの作成なども必要とされている。

最後にCAMに関して将来的なあり方という観点からすると、医学はひとつであり主流/非主流あるいは通常/代替などと相対すべきものではないはずである。同一の患者に二つの医学あるいは医療が存在することはありえない。これはある意味で患者にとって不幸であり、それを許容することは医学の怠慢とも考えられる。よく計

画された臨床試験から得られる十分な証拠に基づいた医療こそ真の医療であり、多くの不確かなことが補完代替の名のもとに漫然と継続されることなく、順次、有効/無効、有害/無害が明らかにされていくべきであろう。

参考文献

- 1) National Institutes of Health, National Center for Complementary and Alternative Medicine, Clinical Trials [See: <http://nccam.nih.gov/clinicaltrials/cancer.htm>]
- 2) National Cancer Institute, Office of Cancer Complementary and Alternative Medicine [See: <http://nccam.nci.nih.gov/health/whatiscom/#1>]
- 3) World Health Organization, WHO Policy and Strategy on Traditional Medicine [See: <http://www.who.int/medicines/organization/trm/orgtrmmain.shtml>]
- 4) Eisenberg DM, Kessler RC, Foster C, et al. Unconventional medicine in the United States. Prevalence, costs, and patterns of use. N Engl J Med 1993; 328(4): 246-252.
- 5) Ernst E, Cassileth BR. The prevalence of complementary/alternative medicine in cancer: A systematic review. Cancer 1998; 83: 777-782.
- 6) Eguchi K, Hyodo I, Saeki H. Current status of cancer patients' perception of alternative medicine in Japan. A preliminary cross-sectional survey. Support Care Cancer 2000; 8(1): 28-32.
- 7) Guideline for the assessment of herbal medicines. Geneva: WHO, 1991.
- 8) Research guideline for evaluating the safety and efficacy of herbal medicines. Manila: WHO Regional Office for the Western Pacific, 1993.
- 9) Guidelines for clinical research on acupuncture. Manila: WHO Regional Office for the Western Pacific, 1995.
- 10) Regulatory situation of herbal medicine: a worldwide review. WHO/TRM/98.1. Geneva: WHO 1998.
- 11) Guideline on basic training and safety in acupuncture. WHO/EDM/99.1. Geneva: WHO 1999.
- 12) Kamohara S. Alternative Medicine. Tokyo. Tyuou Kouron Shinsha. 2002: 30-35.
- 13) Yamashita H, Tsukayama H, and Sugishita C. Popularity of complementary and alternative medicine in Japan: a telephone survey. Complement Ther Med 2002; 10: 84-93.
- 14) Tsuruoka K, Tsuruoka Y, Kajii E. Complementary medicine education in Japanese medical schools: a survey. Complement Ther Med. 2001; 9(1): 28-33.
- 15) Angell M, Kassirer JP. Alternative medicine—the risks of untested and unregulated remedies. N Engl J Med 1998; 339(12): 839-841.
- 16) Markman M. Interactions between academic oncology and alternative/complementary/ integrative medicine: complex but necessary. J Clin Oncol 2001; 19(18 Suppl): 52S-53S.
- 17) Antman K, Benson MC, Chabot J, et al. Complementary and alternative medicine: the role of the cancer center. J Clin Oncol

- 2001; 19(18 Suppl): 55S–60S.
- 18) Cassileth BR. Enhancing doctor-patient communication. *J Clin Oncol* 2001; 19(18 Suppl): 61S–63S.
- 19) Imanishi J, Watanabe S, Satoh M, et al: Japanese doctors' attitudes to complementary medicine. *Lancet* 1999; 354: 1735–1736.
- 20) Hyodo I, Eguchi K, Nishina T, et al. Perception and attitude of clinical oncologists on complementary and alternative medicine. *Cancer* 2003; 97(11): 2861–2868.
- 21) Falardeau P, Champagne P, Poyet P, et al. Neovastat, a naturally occurring multifunctional antiangiogenic drug, in phase III clinical trials. *Semin Oncol* 2001; 28(6): 620–625.
- 22) Slifman NR, Obermeyer WR, Aloï BK, et al. Contamination of botanical dietary supplements by *Digitalis lanata*. *N Engl J Med* 1998; 339(12): 806–811.
- 23) Beigel Y, Ostfeld I, Schoenfeld N. Clinical problem-solving. A leading question. *N Engl J Med* 1998; 339(12): 827–830.
- 24) DiPaola RS, Zhang H, Lambert GH, et al. Clinical and biologic activity of an estrogenic herbal combination (PC-SPES) in prostate cancer. *N Engl J Med* 1998; 339(12): 785–791.

ABSTRACT

Complementary and Alternative Medicine in Cancer Treatment

Ichinosuke HYODO

Department of Internal Medicine, National Shikoku Cancer Center

Interest in complementary and alternative medicine (CAM) has grown rapidly, fueled by Internet marketing, dissatisfaction with mainstream medicine, and the desire of patients to be actively involved in their own health care. CAM products in cancer medicine (herbs and other natural products, such as shark cartilage, mushrooms, and so on) are widely available in Japan as well as in western countries. With little reliable information and few clinical trials to assess the efficacy of such products, there is a great need for public and professional education regarding this subject.

Key words: complementary medicine, alternative medicine, cancer treatment, clinical trial